

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26370269

研究課題名（和文）エリザベス朝宮廷政治文化と演劇興行のインターフェイス - 少年劇団の触媒機能を中心に

研究課題名（英文）A Study of the Rise of Elizabethan Drama with Special Reference to the Boy Companies and Court Culture

研究代表者

佐野 隆弥（SANO, Takaya）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90196296

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000 円

研究成果の概要（和文）：1570年代から80年代にかけて生成発展した演劇文化の状況を、歴史的・政治的・宗教的コンテキストにおいて調査分析し、該当時期における演劇文化と宮廷政治文化との関係を、取り分け少年劇団の活動に注目しながら、実証的に記述した。本プロジェクトでは特に、宮廷政治文化および少年劇団との連関が濃密だと考えられる3人の劇作家 ジョージ・ギャスコイン、ジョージ・ピール、ジョン・リリー に焦点を絞り、彼らの劇作に影響を与えた政治宗教環境とその特質を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study explores the influences the Elizabethan court culture exerted on Elizabethan drama from the 1570s to the 1580s. It also investigates how three dramatists--George Gascoigne, George Peele, and John Lyly who all seem to have many dynamic connections and contacts with the boy companies--generated and developed Elizabethan drama through analyses of their dramatic texts and prose works. This study has been conducted as part of a broader research project of mine which seeks to describe the rise of Elizabethan drama.

研究分野：人文学

キーワード：英国国教会 マーティン・マープレリット論争 少年劇団 ケニルワース・エンターテインメント George Gascoigne George Peele John Lyly エリザベス朝散文

1. 研究開始当初の背景

エリザベス朝演劇文化の立ち上げや構築に関する研究は、古くから行われており、特に20世紀のE. K. ChambersやG. Wickham, G. E. Bentleyなどの先学たちの研究は優れたもので、その成果の多くは今日でも妥当なものとして受け入れられている。研究代表者もこれまで、2度の基盤研究(C)のプロジェクトを中心に、エリザベス朝演劇文化の起業について研究を続けてきた。本研究の課題である、エリザベス朝期における宮廷政治文化と演劇興行の起業に関する相互作用の研究は、従前からの研究成果を踏まえた上で、分析対象を少年劇団という興行形態に特化した、発展的研究である。

1570年代から80年代にかけてのイングランドでは、英国国教会の体制強化と国家意識の高揚を通して、自国文化創造の模索がなされていた。こうした機運の中心にいたのが政治と一体化した宮廷文化であったが、同時にマスメディア的機能を有する民衆演劇も擡頭しつつあり、その接点にいて触媒的役目を果たしたのが、複数の少年劇団であった。これらの少年劇団は、教会や宮廷といった体制側の公的な庇護を受けながらも、同時期に出現した成人劇団による商業演劇との接触を通して、演劇文化の水準を高めることに大いに貢献したが、John Lylyの事例を除けば、当該時期のイングランドにおける、宮廷政治文化と演劇産出との関係については不分明な点が多く残っており、エリザベス朝演劇文化研究者の理解も十分とは言えない。

本研究は、先行研究を包括的に再検討した上で、当該時期の少年劇団と関係の深いGeorge Gascoigne、George Peele、Lylyの3名を主軸に、この21世紀において、適切なエリザベス朝文化史の構築を試みた。従来の文化史研究の中には、特定の事象への偏りや断片的な分析も散見されるが、本研究では、実証的に構築されたエリザベス朝文化史を通しての、宮廷政治文化と演劇産業の動態解明を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、エリザベス朝期における宮廷政治文化と演劇興行の接続・相互作用を解明することであり、取り分け少年劇団が演劇の起業に与えた影響に注目した。その上で、1570年代・80年代イングランドにおける、演劇文化が立ち上げられる様を、宮廷政治文化との関連を念頭に置きながら、実証的に再構成し記述を行った。取り分け、演劇文化の起業に大きく与った「少年劇団」とそれに連なる劇作家に注目し、彼等の政治・宗教的位置と、演劇産業成立に果たした触媒的機能を探り、併せて、Gascoigne、Peele、Lylyの戯曲と散文作品を検証し、テクストの特質を明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 1570年代・80年代における宮廷を中心とした政治環境と、そこにおける文化状況を詳細に調査し、記述する。政府・枢密院資料、英国国教会関連資料、星室庁令その他の歴史資料を精査し、該当時期の経緯を検証し、国教会体制の変遷とその影響を歴史的に跡付ける。その上で、宮廷政治と演劇を中心とした文化状況の関係について調査する。そして上記の分析を踏まえて、Gascoigneがプロデューサーを務めた1575年のケニルワースのページェント(この時期に最も影響力を持っていたLeicester伯の居城で開催された女王歓迎の余興。少年劇団と成人劇団が共同で上演したとされている)を検証する。同ページェントは初期のElizabeth Iの宮廷政治文化を象徴する重要なイベントであり、王室礼拝堂少年劇団と成人劇団が接触した可能性が高いにもかかわらず、この点に関する研究はほとんど進んでいない。本研究では、Gascoigneによるケニルワースにおけるページェントの運営を中心に、宮廷政治文化と王室礼拝堂少年劇団との関係を考察し、その実態を明らかにする。

(2) Peeleは、大学才人の中で最も早い時期から活動した劇作家であり、また多方面にわたる演劇的イノベーションを打ち出した人物であるにもかかわらず、他の大学才人と比べて、その研究はきわめて遅れている。Peeleは従来、Shakespeareの先駆者たちの1人として公衆劇場との関わりのもと、その戯曲が散発的に分析されてきた。しかし、成人劇団用の劇場座と少年劇団用の第1次ブラックフライアーズ座が共に開場した1576年からも遠くない1580年前後から演劇界と関係を持つようになったPeeleは、どちらの世界にも参入する正に境界面で活動する存在であり、宮廷政治文化と民衆演劇を繋ぐ重要な劇作家なのである。特に、1581年頃の創作とされる*The Arraignment of Paris*が宮廷で上演された一方、Peeleの残りの戯曲はすべて成人劇団の手で上演された。本研究では、この神話的牧歌劇*The Arraignment of Paris*を中心に、それ以降のPeeleのキャリアを考慮に入れながら、Peeleの戯曲を上演した王室礼拝堂少年劇団と彼等の本拠地であった第1次ブラックフライアーズ座の関係を明らかにする。

(3) Lylyは、1580年代の初期より、Oxford伯に仕えていた関係でセント・ポール少年劇団と関わり、その座付き作者として劇団の経営に当たっていた。少年劇団は元来宮廷と結び付きの強い存在であったが、そのことは逆に、少年劇団による宮廷上演が、宮廷の政治的・宗教的環境の影響を受けやすいことを意味している。劇作家として再スタートしたLylyは喜劇に特化して作品提供を行い、Elizabeth I賛美の政治的寓意を凝らした劇作を続けていたが、マーティン・マープレリト論争へ介入することで少年劇団の衰退を招いてもいる。本研究では、このようなLyly

の政治的・宗教的振る舞いの分析を中心に据えながら、Lyly の複数の後期宮廷喜劇を取り上げ、宮廷政治文化と少年劇団のインターフェイスを時系列的に明らかにする。

4. 研究成果

2014 年度～2016 年度の 3 年間に 5 件の原著論文を刊行し、4 件の口頭発表を行った。また図書を 2 件出版した。研究成果の概要を以下に述べる。

(1) 原著論文 (すべて単著)

「John Lyly の後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団 *Midas* (1589) を事例として」(2017 年)

本論文は、劇作家としての Lyly の後半期の活動を分析対象とし、該当時期における Lyly の政治的振る舞いを解析し、セント・ポール少年劇団の機能について明らかにした論考である。その際に注目したのが *Midas* であり、その理由は、*Midas* の創作と上演が、マープレリット論争という Lyly にとり複雑で厄介な課題への対応と、同時並行的に処理されていた確率が高くなると考えられるからである。その意味で *Midas* の分析は、Lyly の劇作家としての活動の最もクリティカルな局面をのぞき見る、重要な手続きと考えてよい。Lyly が *Midas* で行ったことは、スペインのネガティブな表象であったが、Lyly が想定した実際の効果は、むしろそのネガティブな表象を通して、Elizabeth I のポジティブな表象を、より強く照らし出すことであったと考えられる。Lyly がそのような劇作術を投入した動機として、一つには、マープレリット論争での貢献と *Midas* における女王賛美とがもたらす相乗効果を狙ったこと、今一つは、論争におけるリスクを *Midas* における明白なオマージュで回避し、自らのキャリアを管理し、保身を図ろうと意図したこと この 2 点を指摘することが可能である。

「George Gascoigne in 1575 ケニルワース・エンターテインメントと少年劇団」(2016 年)

エリザベス朝の商業演劇の興隆を考察する際、少年劇団の存在とその機能を考慮に入れることが重要であるが、本論文は、その両者の結節点に位置していたと考えられる Gascoigne と彼がプロデュースした 1575 年のケニルワース・エンターテインメントを分析し、成人劇団と少年劇団の接触の実態を調査した。このペイジェントには、*The Princely pleasures* および *A LETTER* と呼称される 2 点の資料が残されているが、それらの検証にペイジェントのテキスト自体の分析を加味することで、成人劇団と少年劇団が共通して使用した神話や言説を抽出することが可能となった。結論として、(a) 主席観客としての Elizabeth I の虚構世界への取り込み、および(b)アーサー王伝説の領有、の 2

項目が重要な事象であることを明らかにした。

Marisa R. Cull, *Shakespeare's Princes of Wales: English Identity and the Welsh Connection* (Oxford UP, 2014) (2016 年)

本書は、そのタイトルが明示しているように、Prince of Wales の制度とその意味を初期近代演劇の中に探り、その作業を通して、ウェールズを他者としたイングランドのアイデンティティ形成を記述しようとする試みである。Prince of Wales が複数形の Princes of Wales と表記されていることがポイントで、単なる「王位推定継承者である皇太子」という概念には収まりきらない、多面的な Prince of Wales の地位や身分・システム (princedom) を指摘・考察することで、イングランドの国家意識生成をあぶり出すことが Cull のゴールとなる。著者は、本書における 3 大関心事として、王位継承をめぐるマター、ウェールズの併合と領有をめぐるマター、そして James I の唱える大ブリテン帝国をめぐるマターを主張した上で、Shakespeare の *Henry IV* や *Henry V*、Peele の *Edward I* さらには 17 世紀前半の複数の戯曲を対象に、各戯曲に表象された Prince of Wales と上演時のポリティックスとの相関関係を記述してゆく。

しかし、Cull の指摘する相関関係が、必ずしも因果関係であるとは限らない点に留意しなければならない。確かに現象面でのシンクロニズムは、そこに何かしらの因果関係を想定させ得るものだが、単なる偶発的な同時性である可能性も存在する。Cull の議論がより説得性を増すためには、政治的現象と演劇的現象とを有機的・論理的に結びつける実証的証拠の提示が必要であり、そのためには、演劇はどこまで政治を反映したものであるのか、演劇は政治に対してどれほど力を振るい得る存在であるのかという、シェイクスピア批評が政治化して以来、繰り返し取り組まれてきた難題に、著者も正面から向き合う必要がある。

「エリザベス朝散文とその後(2) 17 世紀科学革命期を中心に」(2015 年)

17 世紀に生じた王立協会による英語改良運動や、Margaret Cavendish の科学的エッセイである *Observations upon Experimental Philosophy* (1666) に観察される分析的記述法を議論に取り込み、英語という言葉がこの時期から実利的な記述へと向かった現象を検証した。英語の近代化へ作用した力は、事象記述の写実性を担保するヴェクトルと、教訓等の規範的な力との干渉に規定されるが、全体としてはフォームへの方向性を有するものであることを明らかにした。

Richard Rowland, *Thomas Heywood's Theatre, 1599-1639: Locations, Transla-*

tions, and Conflict (Ashgate, 2010) (2014年)

Rowland による本書は、McLuskie の先行研究書以来 16 年ぶりに刊行された Heywood のモノグラフであり、「市民劇作家」や「職人作家」また場合によっては「三文文士」とおとしめられてきた Heywood の評価をくつがえし、新たな再評価を迫ろうとする、意欲的な研究書である。換言すれば、ここには、凡庸な職業劇作家などではなく、西洋古典に通じた、反体制的な声の持ち主としての Heywood 像が構築されていて、それがどこまで成功しているかは別にしても、まったく別の Heywood 像を提示しようとする Rowland の戦略が見え隠れしている。Heywood という劇作家は、キャリアを積み重ねる毎にジャンルを移動していった芝居書きであり、その意味で、Heywood 劇を時代順に並べることが同時にジャンルのくくりとも対応している。本書の構成も、イングランド史劇から家庭悲劇へ、さらにローマ喜劇の翻案劇から 1630 年代のパジェントへと、タイトルに掲げられた通りの、1599 年から 1639 年までの 40 年間の Heywood の経歴を、Rowland は辿ってゆく。

総合的に評価すれば、本書は Heywood の再評価という所期の目的を達成していて、今後 Heywood の分析や調査を試みる研究者は本書を避けて通ることはできず、そこから莫大な情報やデータ、また洞察やヒントが得られる、Heywood 学にとり必須の文献となることは間違いないであろう。しかし同時に、本書には、一貫した有機的なヴィジョンの下に構築された、システマティックなデスク립ションの構造が完全に欠落している。本書は体系的な議論を有するモノグラフと言うよりは、長大な脚注の巨大な集合体とでも形容すべきものであろう。

(2) 口頭発表 (すべて単独)

「John Lyly の後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団 *Midas* (1589) を事例として」(2016 年 9 月)

原著論文「John Lyly の後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団 *Midas* (1589) を事例として」(2017 年) に同じ。

“Reconsidering the Princedom of Wales in a Few 1590s Plays” (2016 年 3 月)

原著論文で議論した Cull の *Shakespeare's Princes of Wales: English Identity and the Welsh Connection* を再度取り上げ、同書における分析上のアプローチの問題点を指摘した。それらは、データ収集と解析にまつわる問題であり、演劇研究の領域に限って言えば、研究・調査のための資料収集のことであり、そこから読み取れる情報のことを意味する。Cull の試みは、Prince of Wales という政治システムに関する歴史的記述と、16・17 世紀の戯曲におけるその表象

分析であるが、そこにはデータ解析の公平性が担保されなければならない。Cull の記述はこの点恣意的であり、その例証を Robert Greene の *Friar Bacon and Friar Bungay* (1591) を用いて行った。

「宮廷上演劇としての *The Arraignment of Paris* George Peele と少年劇団」(2015 年 10 月)

通常の演劇史において、商業演劇成立期における少年劇団の影響は成人劇団との「競合」関係のもとに記述されることが多いが、少年劇団が初期の大学才人を中心とする商業演劇の成長に及ぼした影響に関してはいまだ十分に解明されていない。本研究では、この課題に対応する一つの可能性として、大学才人の活動の中でも最も早い時期の成果の一つである、Peele の *The Arraignment of Paris* に着目し、そこに流入する多系統の演劇的伝統のチャンネルの解明を試みた。その際の作業仮説として、原著論文の成果に基づき、ケニルワース・エンターテインメントにおける、Gascoigne と William Hunnis ら少年劇団関係者とが交渉したと考えられる現象を複数示唆し、女王の虚構世界への取り込みなどの重要項目を指摘した。結論として、*The Arraignment of Paris* が、ケニルワースの余興で生じた少年劇団との交渉のエッセンスを色濃く取り込みながらも、それ以外にも、討論劇など Peele に関われていた演劇的伝統の要素を摂取した戯曲と考えることができることを明らかにした。

「George Gascoigne in 1575 ケニルワース・エンターテインメントと少年劇団」(2015 年 3 月)

原著論文「George Gascoigne in 1575 ケニルワース・エンターテインメントと少年劇団」(2016 年) に同じ。

(3) 図書 (すべて単著)

『エリザベス朝史劇と国家表象 演劇はイングランドをどう描いたか』(2015 年)

本書は、広義のエリザベス朝演劇に固有のジャンルである歴史劇(イングランド史劇)の全戯曲(約 50 編)を分析対象にした演劇史研究である。各作品に表象されたイングランドの姿を通時的に検証し、近代国家形成期の時代潮流との関わり合いを解析した。結論として、1530 年代を中心に Henry VIII が施行した宗教改革関連法ならびに修道院解散法と、一連のこの改革が惹起したスペインを始めとするカトリック勢力との多面的な摩擦が重要な契機となったことを明らかにした。

「ジョン・リリーの出發 セシル、オックスフォード伯、『キャンパスピ』」(2015 年)

本論文は、Lyly の処女戯曲 *Campaspe*

(1584)の制作の動機ならびにプロセスに注目し、Lyly の劇作家としてのキャリア構築を分析した論考である。散文口マンズ 2 部作完成間近の時期に、大学でのキャリアを断念し文筆を利用した立身を考えていた Lyly は、William Cecil を介して、政治的復権の道を模索していた Oxford 伯という知己を得、ここに成立した利害の一致が、2 人の主従関係を生み出したものと考えられる。結論として、本劇は、宮廷内における権勢の回復を画策する Oxford 伯の求めに応じて創作上演されたこと、およびこのパトロン関係に、時の権力者 Cecil 父子が関わっていることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

(1) 佐野隆弥、John Lyly の後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団 *Midas* (1589)を事例として、『文藝言語研究』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻) 査読有、第 71 巻、pp. 89-106、2017 年。

(2) 佐野隆弥、George Gascoigne in 1575 ケニルワース・エンターテインメントと少年劇団、『文藝言語研究』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻) 査読有、第 69 巻、pp. 1-17、2016 年。
<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/>

(3) Takaya Sano、Marisa R. Cull, *Shakespeare's Princes of Wales: English Identity and the Welsh Connection* (Oxford UP, 2014)、*Shakespeare Studies* (日本シェイクスピア協会) 査読有、Vol. 53、pp. 66-68、2016 年。

(4) 佐野隆弥、エリザベス朝散文とその後(2) 17 世紀科学革命期を中心に、『文藝言語研究 文藝篇』(筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻) 査読有、第 67 巻、pp. 9-21、2015 年。
<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/>

(5) 佐野隆弥、Richard Rowland, *Thomas Heywood's Theatre, 1599-1639: Locations, Translations, and Conflict* (Ashgate, 2010)、『関西シェイクスピア研究会会報』(関西シェイクスピア研究会) 査読無、第 35 号、p. 10、2014 年。

〔学会発表〕(計 4 件)

(1) 佐野隆弥、John Lyly の後期喜劇に関わる政治的環境と少年劇団 *Midas* (1589)を事例として、第 25 回エリザベス朝研究会、2016 年 9 月 10 日、慶應義塾大学(神奈川県横浜市)。

(2) 佐野隆弥、“Reconsidering the Princedom of Wales in a Few 1590s Plays”、第 23 回エリザベス朝研究会、2016 年 3 月 26

日、慶應義塾大学(神奈川県横浜市)。

(3) 佐野隆弥、宮廷上演劇としての *The Arraignment of Paris* George Peele と少年劇団、第 54 回シェイクスピア学会、2015 年 10 月 10 日、北海道教育大学函館校(北海道函館市)。

(4) 佐野隆弥、George Gascoigne in 1575 ケニルワース・エンターテインメントと少年劇団、第 19 回エリザベス朝研究会、2015 年 3 月 17 日、慶應義塾大学(東京都港区)。

〔図書〕(計 2 件)

(1) 佐野隆弥、エリザベス朝史劇と国家表象 演劇はイングランドをどう描いたか、九州大学出版会、査読有、341 + xxiv 頁、2015 年。

(2) 佐野隆弥、ジョン・リリーの出発 セシル、オックスフォード伯、『キャンパスピ』、『シェイクスピア時代の演劇世界 演劇研究とデジタルアーカイヴズ』(英知明・佐野隆弥・田中一隆・辻照彦編、九州大学出版会) 査読有、pp. 77-91、2015 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐野 隆弥 (SANO, Takaya)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90196296